

3年の歳月が流れる。

この間、日本の政局は目まぐるしく動いてゆく。
安政の大獄は、潜伏している勤王の志士を強く刺激し、
結果として尊王攘夷へのエネルギー集結を促す作用をしている。

その結末が井伊直弼の暗殺であった。

1860年（万延元年）3月、雪の桜田門外において、
登城途中の井伊の行列は水戸藩尊攘派浪士に斬り込まれ、
幕府権威の象徴であった大老井伊直弼が斬殺されてしまう。

幕府重鎮が、江戸城を目前にした桜田門外で、
それも行列に斬り込まれている。
いかに幕府の権威が失墜していたかを伺わせるできごとであった。

井伊によってなんとか支えられていた徳川幕府の威勢は、
これを機に急速に衰えてゆく。

当時、大島にいた西郷はこの情報に接した時、
家を飛び出し、奇声を発する程の狂態を見せて喜んだという。

それから又一年。

その頃の世情は、水戸、長州等脱藩浪士らによる攘夷熱は沸騰しているのだが、表面的にははつきり「倒幕」とまではいっていない。

長州藩長井雅楽の航海遠略策（幕府中心の公武合体論（1861年文久元年））がもてはやされている時期で、それに刺激されて久光が動こうとしていた。

当時、久光は藩の革新派閥誠忠組の大久保利通や小松帯刀らを自分の懐刀として重用していた。
皮肉にも、誠忠組の影の頭領は大島に流されている西郷なのである。

幕政改革への野心を燃やす久光に、大久保らは次のように献策している。

「まず、殿が兵を率いて上洛し、朝廷守護の名目で宮廷を威圧し、朝廷から一橋慶喜を將軍後見職に、松平春獄を政治総裁にせよ、と勅許をださせるのです。

その上で江戸に出向き、これを幕府に迫るのがよろしいのでは……」

久光は、大久保らの提案をそのまま受け入れた。

このような状況下で、薩摩藩としては藩内外に隠然とした力を持ち、知名度の高い西郷の「顔」が必要になってくる。